

拒絶する人造人間：人造人間小説 *Frankenstein* と *L'Ève Future* から見る逸脱論

林 美 里

「アンドロイド (android)」という言葉が世界で最初に記録されたのは1728年、Ephraim Chambers (1680?-1740) が編さんした *Cyclopaedia, or Universal Dictionary of Arts and Sciences* の中であった。この中でアンドロイドは “an Automaton, in figure of a Man; which by virtue of certain Springs, & duly contrived, Walks, Speaks. (87)” と定義されている。ギリシア語の “andro- (人、男性)” と接尾語 “-oid (-のようなもの)” が組み合わせさせた “android” は、直訳すれば「人もどき」とできるだろうか。このサイクロペディアの中で「アンドロイド」の用例として用いられている “Albertus Magnus, is recorded as having made an Androides” の中に出てくる Albertus Magnus (1193?-1280) は13世紀に錬金術を実践し検証した神学者のことで、この用例の中での「アンドロイド」は錬金術の「ホムンクルス」と同意義で用いられているようだ。

古くからこの「人もどき」の人造人間への人類の想いは熱く、その系列を時代と共に遡れば、先ほどのホムンクルスや、ユダヤ思想から創出されたゴーレム、ギリシア神話のタロースなど枚挙に暇が無い。先ず始めに思想を抱き、自然哲学の道をたどって科学研究が始まり、人の形をなさない機械が十分に人間の一部の機能の代理を務められるようになった現代に至るまで、なぜ人は「人」の形に夢を抱き「人」を作ることにこだわり続けるのだろうか。

人造人間には暗黙の規則がある。人造人間は人間の使い手、道具になる

べく創出されたものであり、道具として人間が使うためには、彼らは人間より階下の存在でなくてはならない。タロースの胴体に流れる一本の聖なる血管といい、ゴーレムの“meth”といい、フラスコ内でのみ生きることの出来るホムンクルスの制約といい、人造人間は人間によって決定的な弱点を背負わされ、人間の思うままに彼らの命を操ることが出来るようになっていく。人造人間はあくまでも「劣化人間」であり、完璧な人間では無い。そして人間と人造人間の間には絶対的なヒエラルキーが存在していた。

1818年に発行されたMary Wollstonecraft Shelley (1797-1851)によるゴシック小説 *Frankenstein* では前述のような既存の人造人間観に少しずつ変化が表れてきたのを見いだすことが出来る。*Frankenstein* が発表されてから約半世紀後、「アンドロイド」の言葉が生まれてから約1世紀半後の1886年、フランスの風刺作家 Villiers de l'Isle-Adam (1838-1889)による小説 *L'Ève Future* (『未来のイヴ』、*Eve of the Future Eden*) が誕生、小説に於いて初めて「アンドロイド」がテーマとして扱われるようになった。*L'Ève future* では、「理想 (HADALY)」というラテン語を持った完璧なるアンドロイドによって、かつての「劣等人間」では為しえなかった、近代社会における新しい象徴を「人造人間」から見いだすことに成功している。今回はこの両作品から、19世紀近代社会思想における「人造人間」の死生観を追い、そこから派生し現代のアンドロイドにも通じる人造人間の逸脱論について考えてみたい。

1. 人造人間にみる「死」のモチーフ

Frankenstein と *L'Ève Future*、この両作品内に終始纏わり付く「死」のモチーフは、人造人間の宿命、その物語の行く末を暗示させる重要なファクターである。しかしそれらは単に悲劇的結末への導線として扱われているだけではない。

Frankenstein の中で主人公 Frankenstein は “It was the secrets of heaven and earth that I desired to learn; and whether it was the outward substance of

things or the inner spirit of nature and the mysterious soul of man that occupied me, still my inquiries were directed to the metaphysical, or in its highest sense, the physical secrets of the world.” (37) のように、小さいときから天地の秘密に強い関心を示し、自然哲学に傾倒していた。

人造人間を制作するまでの課程において、彼の中の追求歴には三つの大きな転換期がある。最初の転換期はある日雷で倒壊した檜の老木を見たことから彼は「電気の法則」を知り、大きな衝撃を受ける。その後、それまでの哲学思想への傾倒から一転、自然哲学は退化した研究、数学的な学問こそ至高であるとそれまで自分が崇高していた学問を否定するようになる。

次の転換期は、彼の母親が悪性の熱病に感染し亡くなった時。大学進学のため独り暮らしで故郷を離れる準備をしていた時のこと、彼が大切に想っていた母の喪失は彼にとって絶望そのものであった。

その後大学に進学し、指導教授に研究指導を受けた Frankenstein はそれまで独学では学ぶことの無かった最新の知識に触れ、またとある講義の教授の自然科学の講義に大きな衝撃を受ける。彼はとりつかれたように自然科学へのめりこみ、次第にその関心が「生」の本質へ、そしてその反対の「死」に集中しはじめた。“To examine the causes of life, we must first have recourse to death. I became acquainted with the science of anatomy . . . I paused, examining and analysing all the minutiae of causation, as exemplified in the change from life to death, and death to life, until from the midst of this darkness a sudden light broke in upon me — .” (51–52)

「近代技術」対「自然の摂理」。自らが現存する人類の知恵と技術を駆使し、本来永遠に死の闇に葬り去られるべき屍を再生させ、再び生の世界へ旅立たせる。彼にとっての人造人間計画の到達目標は、自然の摂理に抗い、死によって苦しめられる深い悲しみと絶大な喪失感に何らかの希望と救いを見いだそうとすることであった。母の死という、彼にとっての強い喪失感が大切な人を奪った自然の摂理に対する挑戦への欲望へと次第に無意識のうちに彼を駆り立てていったのである。

人造人間を作るにあたり、彼は死体そのものが腐乱し、朽ちてゆく時間経過の過程をつぶさに観察した。「死体」という「死」固有を象徴する要素、そして「腐乱」という時間の過程を伴う退廃要素——それらは *Frankenstein* が最終的に突き詰めた「死」の真理だった。彼は解剖室や屠殺場から人間・動物の屍からそのままの人体のパーツを集め、それらをつなぎ合わせることによって一体の人間を再形成しようとした。朽ちゆく死体そのものを再構築してそこに再び命を宿らせる、*Frankenstein* の蘇生観にはそんなタイムパラドックスの様式が備わっている。

「生」の解明という大義名分の元、それらに執心する主人公自身の姿も次第に青ざめ生氣を失った佇まいへと変化してゆく。彼そのものもまた物語の「死」のモチーフに取り込まれているのである。

Frankenstein から半世紀後に発表された *L'Ève Future* ではそんな *Frankenstein* の死体蘇生という概念が同様に作品の概念として継承されている予感を感じさせる節がある。「私はこの「幻」の女に、物語作家ホフマンの「アントニヤ」の歌ふあらゆる歌を、エドガー・ポーの「リジェイヤ」のあらゆる情熱的な神秘性を、雄渾な音楽家ワグナーの「ヴィナス」のあらゆる萌えるやうな魅惑の力を授けることでせう！」(137)。この中に出てくる Edgar Allan Poe (1809–1849) の *Ligeias* (1838) は死んだ先妻が後妻の身体を借りて蘇るというもので、『人造美女は可能か？』(2006) の中で巽孝之氏は Poe に始まる美女再生譚を語る中でこの箇所に触れ、「とくに一番有名な「ライジーア」は、リラダンの『未来のイヴ』でも言及されている。いちど死んだ美女を生き返らせる、というポオの発想はメアリ・シェリーのフランケンシュタイン博士のように、死体をもとに人造人間を作る、という構図をどこか反復しているのだろう。」(113) と述べている。*L'Ève Future* だけでなく人造人間小説をはじめ蘇生をテーマに扱った作品は *Frankenstein* の蘇生観に少なからず影響を受けているのかもしれない。*Persons and Thing* (2008) 著者の Barbara Johnson は「人造人間」という概念の起源について、*L'Ève Future* や Friedrich Christian Anton “Fritz” Lang (1890–1976) による

モノクロサイレント映画 *Metropolis* (1926) のアンドロイドと比較しつつ、このように述べている。

The artificial woman in Villiers's novel is always called "l'Andreid"-the Android. And the "False Maria" in Fritz Lang's *Metropolis-loosely* based on Villiers's Eve-really does look like a machine. Bur the people actually working in the field of "artificial life" look back not to an android bur to reanimated body parts-which they call "wetware"-in *Frankenstein* for their origin. (157)

Frankenstein の中で死は直接的に描かれていたのに対して、*L'Ève Future* では死はより精神的なものになり、アンドロイドを制作する Thomas Alva Edison (英語版: The Professor X) は「死」を形而的モチーフとして自分の計画を彩る装飾部品として扱っている。

Lord Ewald と面会する前の Edison はアンドロイドを開発する工房そのものを一つの大きな墓の形になぞらえ、自らの創造する世界をその箱庭的空間内で完結させていた。

Edison が建物の階下数百尺にある巨大な地下洞窟を発見した当初、そこには原住民族の遺骨やミイラが埋蔵されていた。彼はそれを洞窟の片隅に隔離し、空いた空間にアンドロイドを中心として、鳥、花々等全て人工生物で構成された彼の世界を作り上げた。第二章「黄泉ニ下ルハ易シ」にて Edison は Ewald を伴い、その地下の創造空間に向かうことになるが、そこに向かうエレベーターは墓石のような形状をしていて、あたかも現世から墓石の地面下の死者の世界へ旅立つような様相である。*Frankenstein* の死者蘇生の如く、蘇生前の動作が停止中のアンドロイドは黒檀の棺の中に屍の如く納められている。

この象徴的な寶物箱の内側は、人造人間がしっかりと収まるやうに正確に女體の形に削られているのです。これがお嫁入り道具なのですね。上の蓋は星形の小さな黄金の鍵で開けられ、その錠前は眠る女の枕の

下についてみます。…顔はそこでは面紗で蔽はれます。頭は、髪の毛に埋もれたまま、クッションの上に凭せかけられ、額は、真中を寶石でとめた額飾りの帯で抑へて、少しも動かぬようにします。もし亂れのない穏やかな呼吸をしてみなければ、これを見る人は、その日朝死んだミス・アリシヤ・クラリーだと思ひ込むに違ひありません。(165-166)

アンドロイドは彼女の処女性を守るかの如く嚴重な箱に施錠された隙の無い状態で収容されており、アンドロイドを所有する人間は先ず、その嚴重な梱包を解かねばならない。棺を開けてアンドロイドに電源が入り、命が点る様子はあたかも屍から命が蘇るようである。死者は棺に納められ、深い土に埋められることで永遠に密閉される。嚴重に密閉された棺を開封し屍を起こす作業行程は、葬式の進行を遡っているのに等しい。蘇生概念として、核の所では *Frankenstein* で既に擁立されたタイムパラドックスを踏襲しつつ、*L'Ève Future* では更に莊嚴な儀式化がなされ、「死」をより形而的に捉えているのが見られる。

2. 「不気味の谷」の引力

人造人間の逸脱論について考える前に、少し現代のアンドロイドの話挿入することをお許し頂きたい。

現在開発中のアンドロイドの中に大阪大学大学院工学研究科の石黒浩教授等が開発した女性アンドロイド「ジェノミノイドF」がある。こちらは周囲の状況を認識し65通りの動作を元に感情の波を表現できる、表情表現に富んだ最先端のアンドロイドのひとつであるが、数年前に都内の公共の場に溶け込むように展示される機会があった(2012年2月1日～14日、於：新宿タカシマヤ)。

この展示は当時注目を集め、自然にデパートの雑踏に溶け込むアンドロイドの様子を見に多くの見物人が会場を訪れた。しかし勿論それ以上にその時会場に居た人の多くは、展示について全く事前知識を頭に入れずたま

たまその場で彼女を目撃したのである。アンドロイドにとって大事なのはおそらくそういった全く事前に知識を入れてこなかった人間が初めてアンドロイドを見つけた際、どのような感情を持つかであろう。

歩行戦車等の戦争ロボット、サイボーグらが登場する世界を扱ったゲーム「メタルギアソリッド」シリーズの開発者小島秀夫氏も、たまたまその場所を訪れた観衆の一人だ。彼はアンドロイドに対面した際の感想をこのように Twitter に残している。

Kojima, Hideo (Kojima_Hideo). “新宿高島屋。ロビーに人だかりがあった。なんだろうと思って近づくと、女性がひとり座っている。... その時、ちょうど人垣がなくなり、近づいてみてやっと気づいた。モデルはひとではなく、機械人形——アンドロイドだった。... でもわかってみると、もう二度と人間には見えない、そこが人とアンドロイドの境になるのか。” 11 February 2012, 20:43–51 p.m. Tweet.

限りなく精巧に人間に似せて作られた最先端のアンドロイドでも、完全な人間になりきることが出来ない。遠目からは人間と思っても近づいて観察すればどうしても感じる不気味の谷現象を現時点でのアンドロイドは克服することが出来ない。こうして「人もどき (android)」はひとたび人間で無いと判断されるや否やたちまち「逸脱者 (outsider)」と認識され、人間が構成する関係社会の枠組みから永久に外されてしまうのである。

3. 人造人間は「死」の輪廻から逃れられるか？

「死」の過程により一度現世から隔絶された人間の器が、その姿そのままに再び命を与えられこの世に戻ってきたら？——*Frankenstein* の怪物、そして *L'Ève Future* の HADALY も同様に、この運命から逃れることは出来ない。

Frankenstein の怪物は、「怪物」の名の通り、そのおどろおどろしい外見によってはじめから畏怖の対象として人間社会から隔絶される運命にあった。制作者である *Frankenstein* 自身も怪物誕生の瞬間、自らの創成物にお

ける全ての責任を放棄し、怪物を見捨てて逃亡してしまう。怪物は自分が何者かも分からないまま怪物は山森の中をさまよう。小鳥がさえずる美しい「生」の世界の喜びを体感しながら怪物はささやかな希望を抱き、何の先入観も持たぬまま山を下り、初めて人間と遭遇する。無教育で理性不在、かつおどろおどろしい外見の怪物に当然人間は彼を人間社会の“敵”と見なし、激しく攻撃・拒絶するが、この時点では怪物にはなぜ自分が拒絶されるのか理由が明確に分からなかった。

攻撃から逃れながら怪物はようやく身を潜められる小さな小屋を見つけ、そこに隠れながら自分を拒絶する人間を観察する生活が始まる。一度「死」によって現世の枠から一旦外された「死体」は決して人間社会で認知され得ない存在である。「非人間」という烙印を押された人造人間が排他された社会と関わるには「逸脱者」として社会の枠組みの外から社会を静観するしかない。

自分の隠れ家に隣接している山小屋に居住する一家に親しみを覚えた怪物は、隣家の家族だけには身内として暖かく迎え入れられたいというささやかな望みを抱き、それを叶えるためにはまがいなりにも1人の人間として認知される必要があると悟ることになる：“I looked upon them as superior beings who would be the arbiters of my future destiny. I formed in my imagination a thousand pictures of presenting myself to them, and their reception of me. I imagined that they would be disgusted, until, by my gentle demeanour and conciliating words, I should first win their favour and afterwards their love.” (115)。その願望を叶えるために彼が着眼したものは、人間と意思疎通する手段である言語、それと対等に言葉を交わせるに足る知識だった。しかし知識を得れば得るほど己の非人間性を深く認識するようになる。彼は苦悶する。その苦しさを克服するための手段は「死」しかない。「死」は逸脱者として悩み苦しんだ末に導き出された、彼なりの美学であった。

And what was I? Of my creation and creator I was absolutely ignorant, but I knew that I possessed no money, no friends, no kind of property. I was, besides, endued with a figure hideously deformed and loathsome; I was not even of the same nature as man. I was more agile than they and could subsist upon coarser diet; I bore the extremes of heat and cold with less injury to my frame; my stature far exceeded theirs. When I looked around I saw and heard of none like me. Was I, then, a monster, a blot upon the earth, from which all men fled and whom all men disowned? . . . “Of what a strange nature is knowledge! It clings to the mind when it has once seized on it like a lichen on the rock. I wished sometimes to shake off all thought and feeling, but I learned that there was but one means to overcome the sensation of pain, and that was death — a state which I feared yet did not understand. I admired virtue and good feelings and loved the gentle manners and amiable qualities of my cottagers, but I was shut out from intercourse with them, except through means which I obtained by stealth, when I was unseen and unknown, and which rather increased than satisfied the desire I had of becoming one among my fellows. (120–121)

後に自分の創成者 Frankenstein に再会しひとつの要求をする——そんな孤独の慰めに自分の連れとなる女性の人造人間を一体作成して欲しい。Frankenstein は最終的にこの願いを拒否、唯一の自分の希望の光を消された怪物は己の「死」に等しい苦しみへの怒りを「死」でもって復習しはじめる。Frankenstein の近親者を次々に殺害、たった一人になった Frankenstein 本人は一人北方海上の船上で客死する。Frankenstein が息絶えたのを確認した怪物は、最後に己の身体を始末すると宣言して舞台から去る。「死」は「生」の希望を得ることが出来なかった怪物の苦悶に対する最終的な答であり、自分のアイデンティティを保つための唯一の武器であったのだ。このように *Frankenstein* の怪物は、外見を始めあらゆる点で人間より劣悪であることを宿命として背負わされていた。

人間の使役としての道具として生み出されたこれまでの人造人間には、

人間と人造人間の間には絶対的なヒエラルキーが存在していたが、*L'Ève Future* では人造人間がついに人間を超える存在として登場している。勿論 *L'Ève Future* 以降も Karel Čapek (1890–1938) の *R.U.R* (1920) をはじめ、人間の使役として生み出された人造人間の物語は多く存在するし、HADALY も本来はそうなることを想定して制作され得たかもしれない。しかし「理想」という名前を与えられた HADALY は結果としては人間を超越し、逆に人間と釣り合わない存在になってしまう。彼女もまた怪物とは違う意味で「逸脱者」だったのだ。

人造人間を発生した事件は発明者 Edison のある種の傲りによるものだった。完全に人工の加工物によって自らの手で生命体を作り出すことに成功した Edison は、死者を自らの手で生存していた姿に複製再現することに着手する。数年前、彼の知人 Anderson が魔性の美しい踊り子 Evelyn Habal と不倫の末、破滅してしまう事件があった。Edison はこの一件を私的に調査し、Anderson 死後同じく憔悴して死亡した Evelyn の復元を成功させた。美しい人造人間制作に成功した Edison は次に完璧な人間の作成に着手し、完成させたのが HADALY の外形部分であった。Edison は完成した HADALY を安易に世に送り出すことはせず、更なる完璧を求めてそのきっかけを待っていた。そこに登場した依頼人 Ewald がふと漏らした言葉が Edison の人造人間制作計画の方向性を決定的なものにしたのだ。「——ああ！ 誰かがあの肉體からあの魂を取除いてくれないかなあ！」。(99)

完璧な人造人間制作を計画していた Edison は Ewald のこの挑戦に応じたが、Michel Carrouges は *Les Machines Célibataires* の中で「ここにこそ未来のイヴ独特のパラドクスがある (154)」と指摘する。Edison は Ewald の夢を超え、Alicia の完璧な肉体に Sowana の完璧な精神を合体させることを提案する。近代科学技術をもって語られてきたはずの人造人間小説 *L'Ève Future* だが Edison は最終的な目的を達成させるのに魔術的創造を用いた。その背景には常に宗教的・神秘的要素を包含し、*Frankenstein* 同様のオカルティスムが横たわっている。HADALY の逸脱論を語る前に、*L'Ève Future* 内にあ

る神秘的要素について、姿無き音声で小説の冒頭から登場し、後に HADALY を結果として支配するようになった「完璧な精神体」、Sowana の存在に注視したい。

Sowana の正体について、作品内で明確に説明される箇所は無い。しかし「眠りの名 (non de sommeil)」と称されるように Anderson の不倫の一件で心に深い傷を負った Anderson 夫人は、その心の傷を癒やすために当時の催眠療法を利用した可能性が高いとみられる。アンダーソン夫人に施した催眠療法について、『ヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』を通して見た「世紀末」』(1984) の中で相野毅氏は HADALY への降霊術を施す前段階の施術であり催眠術という言葉に潜む両義性がアンドロイドの動力源である電流や磁力と結びつけられている点を指摘している。

《magnétisme》・《fluide》といった語の両義性が、この基盤にある。《magnétisme》という言葉には、磁力という意味も、催眠術というあるいは、動物磁気という意味もあり、一方、《fluide》という語には、電流という意味の他に、オカルティズムで言う「流体」という意味もある。例えば、『十九世紀ラールス』の《magnétisme》の項には、磁気という意味の他に、催眠術という意味がのっていて、その説明には、《fluide》という語が見出され、さらには、夢遊病との類似、透視力との関係等の記述がある。一方、ハダリーは、動力源に電気を使っているので、その体の中の描写には、例えば、「電磁モーター」といった電気や磁気にかかわる言葉がつかわれている。この電気としての《fluide》に、ソワナの動物磁気の《fluide》がつながるのだ。このように、この二つの語の両義性のもとに、電磁気の意味場と催眠術の意味場が重ね合わされて、ソワナ＝ハダリーという複合体が生まれることになる。(32)

電流については *Frankenstein* の中でも幾たびも触れられている。大学に入って新しい自然哲学の知識に触れる際電気の法則や流電気の問題について触れる機会を持つ。Frankenstein が蘇生方法の解明を研究する際、“Who shall

conceive the unhallowed damp of the grave or tortured the living animals to animate the lifeless clay?” (54) と、生きた動物を苦しめたりしたと言う描写がある。この生きた動物を苦しめるという箇所は作品発表当時研究が盛んに行われていた対電流による筋肉萎縮の実験を暗示させる。また、怪物が登場するシーンにはしばしば雷の描写が見られ、怪物が疾走する様は「電光」の如くと、「人造人間」と「電流」は *Frankenstein* でも関連づけられて表現されている。

Anderson を信じ、婚姻で交わした清い聖約を守り続けた Anderson 夫人の精神は催眠療法によってその最も純粋な部分が抽出・分離した。清らかな精神体は更に透視能力という超能力を獲得し、Anderson 夫人自体から独立した存在となった。*L'Ève Future* が発表された 19 世紀後半、電気は新しい発見であり目に見えない電力の存在は、科学と超自然を結びつけるものとして考えられていた。(相野 33) Sowana が HADALY に降霊する際、電気の光を伴う描写に於いても超自然的現象と電気が融合し得る関係であることが示唆される。

このように、Edison の願望通りの完璧な精神と肉体が合併し、理想の名にふさわしい完璧な人造人間が完成されたが、この人造人間は産まれながらに生身の人間とは相容れない存在で有り、「死」を宣告されていた。前述したように「墓石」や「柩」などの「死」のモチーフを纏い、完璧なる人間として完成した HADALY は地下の閃光の国より墓石を模したエレベーターに乗っておどろおどろしく地上へと向かう。「2 人の男の足下に陰鬱な物音が聞こえた。それは大地の底、深淵の底から湧き出るように轟いてくる重々しい、そして鎖につながれたような物音であった。悪霊の群れによって暗黒のそこから掘り起こされた墓がひとつ、あばき出されておもむろに地面に向かって上昇して来るかのようだった。」(120-121)

Ewald に譲渡された人造人間は墓石からの脱出一瞬「死」の世界から脱出できたが、Ewald の国へ帰る船が遭難し、乗船していた Alicia は死亡、HADALY も柩に収められたまま Ewald と対面することも無く、一人では

なく一個の荷物として海底へと消えてゆく。Ewald と出会った HADALY は再び「死体」となり、黄泉の世界へ引き戻されることになった。この結末は何を示しているのだろうか。

HADALY は機械という機能に於いても完璧であった。Ewald にとっての理想の恋人となる目的で作成されたアンドロイドだが、HADALY に初めて対面した当初 Ewald は Alicia を模した人造人間を、Alicia としてはもとより人間として受け入れることに当初懐疑的だった。この人造人間の存在を認知することについて相野氏は、Ross Chambers の説にある「恋人達は、自分の欲望がふきこんだモデルを、相手に投影すること以外にはなにもしておらず、人造人間は、その中が空っぽなので、この『創造』にまったく抵抗しない」を引用して説明している (29)。Edison も「彼らが互いに相手の心を推し測るのも、かういふ彼らの夢の果てしない幻の中に限られるのであり」(275) と観念論的解釈で Ewald に恋人としての人造人間の完全性を説明している。

仮に相手の中に心が無いとしても、自分がそこに自分なりの妄想で制作した人格モデルを投影することで、心の通った関係は成立する。Ewald や Anderson 氏が熱中した Alicia や Evelyn などの踊り子たち、現代ではアイドルなどにも当てはめることが出来る女優神話的考え方だ。想像力を豊かにすれば動力を持たない無反応な人形などにも適応可能だろう。しかし HADALY はその点でも完璧な機械だった。その関係性を更に完全な物にするために相手の呼応に反応するだけの完全かつ崇高な人間として理想的な知識データ、イントネーションや口癖をもモデルの Alicia を完全に再現した音声機能、果ては彼女のリアクションや仕草までも完全データ化し、黄金のシリンダーと円盤に記録、完璧に再生・再現できるように作られていた。しかしこの完璧な機能で HADALY は機械としての完全性の臨界に達してしまい、l'Isle-Adam は更に神秘主義的追加要素を加え物語の結末をひっくり返したのである。それが先ほど述べた、完璧な精神である Sowana の存在だった。

HADALY は Ewald に自分の精神が全く別の世界からやってきたことについて、「わたくしは、わたくしを創造した人の思想の中に呼びさまされて姿を現しました。それである方は自分だけで働いてゐるやうに思い込んでゐますが、けれどやはり、それと知らずにわたくしに仕へてゐるのでございます。」(408) と語る。HADALY は完全なる器の中に完全なる魂を再現すべく、既に「魂」として人間から自立した神秘的な謎の存在 Sowana を召還してしまった。Sowana は Alicia の理想の精神として HADALY の身体と融合したが、独立した存在故 HADALY の自我として再び生まれ変わり、結果完璧な肉体と完璧な精神をもった完璧な人造人間 HADALY は自我を獲得してしまう。人間の完全なる機械というものを追求する余り、皮肉にも機械は Ewald たち人間を超えた寄り高みの存在となり、人間対人造人間のヒエラルキーが逆転してしまった。Ewald の恋人という立場に収まるのが存在として不可能になってしまったのだ。

HADALY を譲渡する際 Edison は Ewald の母国へ船に乗って戻る間、HADALY を再び柩の中に収めることを提案する。Edison はその理由を“他の女性のように船酔いを知らない HADALY が平然な顔をして他の女性に恥を欠かせないため”と説明するが、普通の女性の振りをデータとして仕込むことの出来る HADALY がそのような懸念で柩に入る必要は本来全くない。この説明は Ewald を恋人して拒んでいる暗喩に他ならない。「ハダリーは経帳も産衣も知らない、つまり死も生も知らないのだから、海の苦しみ (mal de mer [船酔い]) を、いやもっと正確には母の苦しみ (mal de mère) をも知らない。母なしで生まれたハダリーであれば、みずから母になることもないだろう。実際女たちの社会に彼女は加わることは無い。一個の独身者の機械にとどまるのだ。」(Carruges 165)

このように語感の類似性から「船酔い=母の苦しみ」を暗喩した箇所は、その観点で更に追求すれば、船酔いによる嘔吐はつわりの嘔吐を暗喩し、「嘔吐の拒絶=妊娠の拒絶」、つまり恋人としとの性行為を、恋人としての Ewald と関係を HADALY は拒絶したのだ。Ewald、HADALY、Alicia を乗

せた大西洋航路「ワンダフル号」は大西洋横断の最中、原因不明の船火事に襲われる。乗員乗客が皆一斉に救命艇へ殺到する中、EwaldはHADALYを無我夢中で求め、HADALYの柩が積まれた燃えさかる中甲板へ駆けつけ、HADALYを救おうとするが既に火の手がその行く手を阻んだ。諦めきれない彼は更に途方も無い賞金を出してHADALY奪還に協力する者を募るが勿論そんな危険を冒す者は現れなかった。取り乱したEwaldは最後船員達によって紐で縛られ無理矢理短艇へ引き込まれ、炎上する船から脱出する。HADALYと永遠の別れが確定した瞬間だ。HADALYは結局Ewaldの恋人という役目を拒絶、人間であることを引退し、柩に収められた一個の機械、死体となってまた海の奥底、地底の「死の世界」へ消えてゆく。

4. さいごに

Edisonはアンドロイドを人間として認知するための説明として、「心」の有る無しは彼女たちそのものの中に「心」が存在しているかが問題ではなく、アンドロイドとの対話によって相手の心を感じる自分の「心」が問題である、と観念論を用いた。l'Isle-Adamは実はローマ教皇の権威の絶対性を強調するカトリック主義者、ウルトラモンタニスムスであったと言われている。L'Ève Futureの日本語訳『未来のイヴ』(1977)を執筆した齋藤磯雄氏は、その後書きにl'Isle-Adamがこの作品にこめた風刺について著述している。大貴族の家系の裕福な家庭に生まれ育ったl'Isle-Adamだが、作家としてはなかなか成功せず、生活費の後ろ盾をしてくれたお婆が他界するとまもなく彼は極貧生活を余儀なくされた。l'Isle-Adamの友人レオン・ブロワによれば、強制執行官が家具含め財産の殆どを没収していったため、このL'Ève Future執筆も大半が床に寝そべって執筆されたらしい。そのような背景から彼は低俗なブルジョワジーを辛辣に風刺していた。「ヴィリエが凡俗人間として冷笑するブルジョワの特質は、先にものべたように、拝金思想と物質主義であり、それに功利主義を基盤とする嫌味な常識と、感傷的なヒューマニズムを謳歌する進歩の幻想である。」(490)

彼が作品中使用したヘーゲルの観念論は彼の「敵」であった低俗なブルジョワジーが支持する唯物論的な風潮に反撃するために用いられたのだった。ウルトラモンタニスムであった彼は神への信仰のみを半ば狂信的に信じていた。Edison の科学技術への傲り、完璧な人造人間を制作することで自ら神の域に到達しようという神に対する挑戦、そして人造人間の「死」によって決定づけられる Edison 敗北のシナリオは、近代科学万能主義を風刺する l'Isle-Adam の完全なる計画だったのである。

Frankenstein の怪物の劣悪性、*L'Ève Future* の HADALY の崇高性。「死」の淵から蘇生されたいずれの人造人間も、かくて決して人間と同じ立ち位置で対峙することは永遠にかなうことはなかった。「生」の世界においても彼らは「逸脱者」として社会的「死」を宣告され、再び静かに黄泉の世界へひとり、いや、一個の個体として還って行く。Carrouges がその様を「半ばは人間、半ばは人工物であるという悲劇から生まれる孤独ゆえに、この怪物たちは、近代人特有の苦悩を体現するはえぬきの独身者の機械となる。」(8) と述べるように、近代ヨーロッパ社会で生まれた人造人間小説は「人間」対「超自然＝神」という永遠に続く人類の戦いを背景に、当時の煩雑な社会思想の枝分かれぶり、根強く残る宗教への信仰心と相まって、人類の未来への懸念と葛藤を描きだしたのである。現代のアンドロイド「ジェノミノイド F」は好奇の目で見つめる人間達の視線に一体何を思ったのだろうか。人々の信仰心と共に、人と人造人間の間の不気味の谷は今日も続く。

引用文献

Shelley, Mary. *Frankenstein: or, The Modern Prometheus*. Ed. James Kinsley and M. K. Joseph. Oxford University Press, 1980.

Villiers de l'Isle-Adam, Auguste. *Euvres complètes de de Villiers de l'Isle-Adam, I, L'ÈVE FUTURE*. Ed. Marcel Longuet. Mercure de France, 1922. [ヴィリエ・ド・リラダン (齋藤磯雄訳) 『未来のイヴ』東京創元社、1996年。]

Villiers de l'Isle-Adam, Auguste. *The Future Eve*. Read Books, 2011., Kindle edition.

Carrouges, Michel. *Les Machines Célibataires*, Chene Anc.Fonds, 1991. [高田宏、森永

微訳『独身者の機械 未来のイヴ、さえも...』ありな書房、1991年。]

Johnson, Barbara. *Persons and Things*. Harvard University Press, 2010.

相野毅「ヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』を通して見た「世紀末」」『比較文学年誌』（早稲田大学比較文学研究室）20号、1984年、25-38。

巽孝之・荻野アンナ他編『人造美女は可能か?』慶應義塾大学出版会、2006年。

Kojima, Hideo (Kojima_Hideo). “新宿高島屋。ロビーに人だかりがあった。なんだろうと思って近づくと、女性がひとり座っている。” 11 February 2012, 20:43 p.m. Tweet.

— . “誰かが「ギャル曾根に似てない？」といった。その時、ちょうど人垣がなくなり、近づいてみてやっと気づいた。モデルはひとではなく、機械人形——アンドロイドだった。どうやら「アンドロイドも恋をする？」という大阪大学とのコラボ特別展示だったようだ。” 11 February 2012, 20:47 p.m. Tweet.

— . “でもわかってみると、もう二度と人間には見えない、そこが人とアンドロイドの境になるのか。” 11 February 2012, 20:43-51 p.m. Tweet.

Chambers, Ephraim. *University of Wisconsin Digital Collections: Cyclopaedia, or Universal Dictionary of Arts and Sciences*. 2011. <<http://digidcoll.library.wisc.edu/cgi-bin/HistSciTech/HistSciTech-idx?type=turn&id=HistSciTech.Cyclopaedia01&entity=HistSciTech.Cyclopaedia01.p0135&q1=androides/>>.